

縦断的調査への参加者の特徴についての検討

Study about the Characteristics of the Participants in the Longitudinal Survey

都 筑 学

要 旨

本研究の目的は、縦断的調査への参加者の特徴を検討し、調査対象者全体の意識を代表するかどうかを明らかにすることであった。そのために2008～2011年に実施した高校3年生から卒業3年目までの縦断的調査データにもとづいて検討がなされた。分析の対象となったのは、東京都の市部にある都立高校の3年生4,756人だった。高校3年生における、時間的展望（5下位尺度）、自己意識（4下位尺度）、学校生活意識（2下位尺度）、不定愁訴（1下位尺度）、進路意識（1下位尺度）の得点に関して、縦断的調査への参加表明・不参加の2群を比較した。また、高校3年生調査のみの回答群、縦断的調査に参加表明したが卒業後の郵送調査に返送しなかった群、縦断的調査に参加表明して郵送調査に回答した群の3群を比較した。得られた結果から、7～8割の項目で群間に有意差が見られなかった。このことから、縦断的調査への参加者は、高校3年生全体を代表していると考えられた。

キーワード

縦断的調査, 時間的展望, 高校生

問題と目的

縦断的研究は、発達心理学において発達の知見を得るための大変有益な研究方法論であるが、研究を実施して行くには、いくつかの課題を解決しておく必要がある。第1は、研究の開始から終了までに、長い時間がかか

るということである。第2は、研究計画の実施過程で、調査対象者のドロップアウトが生じるということである。

第1の点に関しては、発達的な変化が生じることが見込まれる期間に焦点を当てることによって、比較的短期間の縦断的調査計画を立てることが可能となる。都筑（2007, 2008, 2009）は、それぞれ、大学から社会へ、小学校から中学校へ、中学校から高校へという学校卒業の前後の環境移行期における時間的展望の変化について、3～4年間の縦断的研究を実施してきた。

第2の点に関しては、都筑（2008）では、同一学区内の小学校と中学校で調査を実施することで、毎年ほぼ一定数の調査データを収集することができた。都筑（2007）では、3回の調査を全て郵送で実施し、都筑（2009）では、中学3年生の学校調査に続いて、縦断的調査への参加希望者に対して卒業1～3年目に郵送調査を実施した。このような卒業後の郵送調査では、ドロップアウトしていく割合を見込んでおき、研究の終了時点において分析に耐えうるようなデータを確保できるような調査計画を立てておく必要がある。これまでの経験から言うと、1,000人の中学3年生に調査をしたとすると、縦断的調査への参加希望者が500名、そのうち卒業後1年目に回答してくれるのが250人、卒業2年目が200人、卒業3年目が180人というように減少していくのが、おおよその傾向である。

調査対象者のドロップアウトに関して、もう1つ考えられることは、縦断的調査に協力してくれる人たちは、どちらかと言えば、熱心で意欲的な人たちであり、最初から協力的でない人や、途中でドロップアウトしていく人たちとは意識等で異なっているのではないかということである。このことを明らかにするために、都筑（2008）は、中学3年生の時点での時間的展望、自己意識、学校享受感、不定愁訴の得点について、次のような群での比較をおこなった。1つ目は、縦断的調査への参加表明・不参加の2

群の比較である。2つ目は、中学3年生調査だけに参加した群、中学3年生調査に参加して縦断的調査への参加表明をしたが、卒業1年目の調査には返信しなかった群、中学3年生調査と卒業1年目の調査の両方に参加した群の比較である。得られた結果では、約8割の尺度では群間に有意差が見られなかったことから、縦断的調査に参加した人たちは、中学3年生の調査対象者を代表していると考えられた。

本研究では、高校卒業前後の縦断的調査データにもとづき、都筑(2008)と同様の分析手順を用いて、縦断的調査に協力してくれた生徒がどのような特徴を持っているのかについて検討する。

方 法

調査計画

本研究における調査データは、Table 1 に示されたように、2008年から2011年の4年間に、1回の学校調査と3回の郵送調査によって収集された。

Table 1 調査計画

調査時期	2008年	2009年	2010年	2011年
学校調査	高校3年	高校3年	高校3年	
郵送調査		卒業1年目	卒業1年目	卒業1年目
			卒業2年目	卒業2年目
				卒業3年目

調査対象者

東京都の市部にある都立高校9校の生徒を対象に学校調査を実施し、継続して卒業後も調査に協力してもらえる場合には、住所・氏名・電話番号の記入を求め、その情報にもとづいて卒業後の郵送調査を実施した。調査対象者の人数は、Table 2 に示した通りである。

Table 2 調査対象者（人）

	2008年	2009年	2010年	2011年
2004年コホート	高校3年	卒業1年目	卒業2年目	卒業3年目
	全体1,724	全体392	全体266	全体191
	(男子805)	(男子150)	(男子96)	(男子71)
	(女子912)	(女子242)	(女子170)	(女子120)
	(不明 7)			
2005年コホート		高校3年	卒業1年目	卒業2年目
		全体1,630	全体303	全体203
		(男子745)	(男子93)	(男子57)
		(女子878)	(女子210)	(女子146)
	(不明 7)			
2006年コホート			高校3年	卒業1年目
			全体1,423	全体267
			(男子654)	(男子101)
			(女子762)	(女子166)
		(不明 7)		

調査内容

学校調査（高校3年生）では、フェースシート，自己意識（21項目），時間的展望（22項目），学校生活意識（12項目），不定愁訴（8項目），進路意識（6項目），縦断的調査への協力願い，について質問した。

結果と考察

本研究では，高校3年生の調査時点における以下の下位尺度の得点にもとづいて分析をおこなう。時間的展望（将来への希望，将来への志向性，空虚感，計画性，将来目標の渴望），自己意識（自己価値，信頼できる他者，自己否定，自己への満足感），学校生活意識（学校享受感，勉強理解度），不定愁訴，進路意識。

(1) 本調査から縦断的調査にかけての対象者の人数推移

Table 3には，縦断的調査における対象者の人数の推移を示してある。

学校調査において、卒業後の縦断的調査に協力を申し出てくれた対象者の割合はコホートによってややバラツキがあったが、ほぼ半数近くに達していた。実際に卒業1年目の調査に回答してくれた対象者は18.6%～22.7%だった。卒業2年目の調査に回答してくれた対象者は、2つのコホートともに10%台だった。

Table 3 調査対象者の人数推移（人）

	本 調 査		縦断的調査		
	高校3年	継続申し出	卒業1年目	卒業2年目	卒業3年目
2004年コホート	1,724	825 (47.9%)	392 (22.7%)	266 (15.4%)	191 (11.1%)
2005年コホート	1,630	703 (43.1%)	303 (18.6%)	203 (12.5%)	
2006年コホート	1,423	692 (48.6%)	267 (18.8%)		

(注) () 内の%は、高校3年のときの人数を母数としたものである。

(2) 高校卒業後の調査への参加表明と不参加との比較

分析の対象となったのは、高校3年生で調査に協力してくれた4,777人のうち、性別が不明だった21人を除いた4,756人である。その内訳は、Table 4 に示した通りである。

Table 4 分析の対象者（人）

	男 子	女 子	全 体
2008年コホート	805	912	1,717
2009年コホート	745	878	1,623
2010年コホート	654	762	1,416
	2,204	2,552	4,756

Table 5 は、高校3年生の調査における、卒業後の調査への協力依頼に対する参加・不参加の態度について、コホートと性ごとに人数を示してある。2009年コホートの男子において参加表明が37.9%と低かったが、それ以外のコホートにおいては4割から5割の生徒が卒業後の調査への参加を表明していた。都筑（2009）の中学3年生から高校生にかけての縦断的調査における参加表明の割合は5～6割であり、それと比較すると高校生の縦断的調査への参加表明の比率はやや低いといえる。

Table 5 高校卒業後の調査への参加・不参加の表明（人）

	男 子		女 子	
	参加表明	不参加	参加表明	不参加
2008年コホート	366 45.5%	439 54.5%	456 50.0%	456 50.0%
2009年コホート	282 37.9%	463 62.1%	418 47.6%	460 52.4%
2010年コホート	297 45.4%	357 54.6%	394 51.7%	368 48.3%

(注) () 内の%は、各コホートの性別ごとの参加・不参加の割合を示している。

Table 6 には、男子における3つのコホートごとの参加・不参加群の平均値を示してある。t検定の結果、2008年コホートでは、「自己価値」(t(767) = 2.30, p<.05), 「自己否定」(t(796) = 2.12, p<.05), 「不定愁訴」(t(792) = 2.92, p<.01), 「進路意識」(t(792) = 2.26, p<.05) で有意差が見られた。2009年コホートでは、「将来への希望」(t(729) = 2.77, p<.01), 「自己価値」(t(718) = 3.04, p<.01), 「信頼できる他者」(t(733) = 2.26, p<.05), 「進路意識」(t(732) = 2.74, p<.01) で有意差が見られた。2010年コホートでは、「自己価値」(t(628) = 2.12, p<.05) と「進路意識」(t(641) = 3.70, p<.01) で有意差が見られた。いずれも参加表明群の方が高い得点を示していた。

Table 6 男子における参加・不参加群の平均値

	2008年コホート				2009年コホート				2010年コホート			
	参加表明		不参加		参加表明		不参加		参加表明		不参加	
	M	SD	M	SD	M	SD	M	SD	M	SD	M	SD
将来への希望	2.64	0.67	2.55	0.60	2.65	0.68	2.51	0.64	2.61	0.67	2.53	0.62
将来への志向性	2.57	0.64	2.51	0.60	2.56	0.68	2.51	0.61	2.57	0.66	2.50	0.64
空虚感	2.50	0.73	2.48	0.67	2.53	0.69	2.50	0.65	2.52	0.70	2.59	0.65
計画性	2.25	0.61	2.27	0.57	2.32	0.55	2.31	0.57	2.28	0.62	2.23	0.54
将来目標の渴望	2.80	0.73	2.85	0.65	2.88	0.68	2.84	0.69	2.91	0.73	2.87	0.67
自己価値	2.49	0.62	2.40	0.55	2.53	0.61	2.39	0.60	2.52	0.63	2.42	0.58
信頼できる他者	2.82	0.74	2.81	0.66	2.89	0.69	2.77	0.69	2.89	0.71	2.80	0.67
自己否定	2.86	0.72	2.76	0.64	2.84	0.67	2.78	0.71	2.89	0.71	2.86	0.64
自己への満足感	2.20	0.77	2.23	0.68	2.20	0.71	2.22	0.72	2.20	0.77	2.20	0.69
学校享受感	2.70	0.72	2.67	0.66	2.78	0.64	2.74	0.62	2.77	0.70	2.70	0.62
勉強理解度	2.16	0.77	2.12	0.72	2.28	0.76	2.25	0.71	2.23	0.72	2.21	0.67
不定愁訴	1.82	0.50	1.72	0.44	1.70	0.44	1.75	0.45	1.75	0.45	1.76	0.46
進路意識	2.86	0.73	2.75	0.71	2.84	0.72	2.69	0.70	2.86	0.73	2.65	0.71

Table 7には、女子における3つのコホートごとの参加・不参加群の平均値を示してある。t検定の結果、2008年コホートでは、「将来への志向性」($t(898) = 2.07, p < .05$)、「信頼できる他者の存在」($t(898) = 2.38, p < .05$)で有意差が見られた。2009年コホートでは、「将来への希望」($t(859) = 2.68, p < .01$)、「将来への志向性」($t(869) = 2.80, p < .01$)、「将来目標の渴望」($t(864) = 2.29, p < .05$)、「自己価値」($t(853) = 2.60, p < .01$)、「進路意識」($t(873) = 2.87, p < .01$)で有意差が見られた。2010年コホートでは、「空虚感」($t(756) = -2.08, p < .05$)、「自己価値」($t(737) = 2.53, p < .05$)、「信頼できる他者の存在」($t(745) = 2.39, p < .05$)、「進路意識」($t(755) = 1.96, p < .05$)で有意差が見られた。空虚感を除いて、いずれも参加表明群の方が高い得点を示していた。

Table 7 女子における参加・不参加群の平均値

	2008年コホート				2009年コホート				2010年コホート			
	参加表明		不参加		参加表明		不参加		参加表明		不参加	
	M	SD	M	SD	M	SD	M	SD	M	SD	M	SD
将来への希望	2.60	0.62	2.53	0.54	2.65	0.63	2.54	0.52	2.62	0.58	2.56	0.57
将来への志向性	2.70	0.63	2.61	0.56	2.73	0.60	2.62	0.56	2.69	0.63	2.64	0.56
空虚感	2.41	0.67	2.40	0.62	2.39	0.68	2.39	0.59	2.39	0.65	2.49	0.63
計画性	2.27	0.55	2.33	0.52	2.25	0.56	2.31	0.53	2.28	0.61	2.28	0.52
将来目標の渴望	2.87	0.66	2.81	0.61	2.97	0.61	2.88	0.60	2.91	0.63	2.87	0.62
自己価値	2.31	0.53	2.25	0.48	2.36	0.50	2.27	0.45	2.37	0.50	2.28	0.45
信頼できる他者	3.27	0.60	3.17	0.61	3.23	0.63	3.19	0.60	3.26	0.60	3.16	0.63
自己否定	2.98	0.59	2.89	0.59	2.91	0.62	2.90	0.60	2.91	0.60	2.93	0.59
自己への満足感	2.00	0.67	2.07	0.65	2.05	0.61	2.07	0.59	2.06	0.59	1.99	0.59
学校享受感	2.80	0.67	2.73	0.65	2.87	0.70	2.82	0.64	2.79	0.69	2.73	0.63
勉強理解度	2.14	0.72	2.16	0.65	2.24	0.75	2.27	0.66	2.22	0.65	2.16	0.69
不定愁訴	1.93	0.44	1.90	0.43	1.93	0.44	1.90	0.42	1.91	0.44	1.90	0.41
進路意識	2.94	0.69	2.87	0.66	3.01	0.67	2.89	0.64	3.00	0.68	2.90	0.67

以上のように、男子では10の尺度、女子では11の尺度において、参加表明群と不参加群との間に有意な差が見られた。男女合わせて、5つのコホートに共通して、参加表明群の方が「自己価値」と「進路意識」の得点が高かった。3つのコホートで両群に差が見られたのが1尺度、2つのコホートで差が見られたのが2尺度、1つのコホートで差が見られたのが2尺度あった。このような差は見られたものの、男女ともに7割以上の尺度では群間に有意差が見られなかった。

(3) 高校卒業後の郵送調査に対する返信のあり・なしの比較

本項で分析の対象となったのは、前項同じ高校3年生の生徒5,756人である。

Table 8には、高校3年生と卒業1年目における2つの調査に対して、

どのような態度を取ったのかを、コホートと男女ごとに示した。高校3年生の調査だけに参加した者の割合は、男子では5～6割台、女子では5割前後だった。高校3年生の調査の際に、卒業後の調査への協力を表明したが、卒業1年目において郵送された調査用紙を返送しなかった者の割合は、男女ともに2割～3割だった。高校3年生と卒業1年目の2回の調査に参加した者の割合は、男子では1割台、女子では2割台だった。この結果から、女子の方が継続的な調査に協力する傾向が少しだけ強いことがわかる。都筑（2009）の中学3年生からの縦断的調査の結果と比較してみると、卒業後の調査に協力してくれる割合は10%前後低かった。

Table 8 高校3年生と卒業1年目の調査に対する態度（人）

	男 子			女 子		
	高3調査のみ参加	高3調査に参加・卒業後調査に無返信	高3・卒業後調査に参加	高3調査のみ参加	高3調査に参加・卒業後調査に無返信	高3・卒業後調査に参加
	高3○	高3◎ 卒1×	高3◎ 卒1○	高3○	高3◎ 卒1×	高3◎ 卒1○
2004年コホート	439	216	150	456	214	242
	54.5%	26.8%	18.6%	50.0%	23.5%	26.5%
2005年コホート	463	189	93	460	208	210
	62.1%	25.4%	12.5%	52.4%	23.7%	23.9%
2006年コホート	357	196	101	368	228	166
	54.6%	30.0%	15.4%	48.3%	29.9%	21.8%

(注) () 内の％は、各コホートの性別ごとの参加・不参加の割合を示している。

○は調査に参加、◎は次の調査への協力申し出、×は調査に不参加を意味する。

3群間に差があるかどうかを検討するために、3つのコホートそれぞれにおいて、男女別に一要因の分散分析をおこない、有意差があったときにはBonferroniの法による多重比較をおこなった。

Table 9 に示したのは、2008年コホートにおける3群の尺度得点である。

男子においては、分散分析の結果、「不定愁訴」(F(2,791) = 4.43, $p < .05$)の主効果が有意だった。多重比較をおこなったところ、卒業後調査で返信なし群は高校3年生調査のみ参加群よりも得点が有意に高かった($p < .05$)。

女子においては、「自己否定」(F(2,903) = 3.42, $p < .05$)と「勉強理解度」(F(2,904) = 4.54, $p < .05$)において有意差が見られた。多重比較をおこなったところ、2度調査参加群は、高校3年生調査のみ参加群よりも有意に「自己否定」の得点が高かった($p < .05$)。2度調査参加群は、「勉強理解度」の得点が卒業後調査で返信なし群よりも有意に高かった($p < .05$)。

Table 9 高校3年生・卒業1年目調査に対する態度3群の尺度得点

(2008年コホート)

	男 子						女 子					
	高3○		高3◎卒1×		高3◎卒1○		高3○		高3◎卒1×		高3◎卒1○	
	M	SD	M	SD	M	SD	M	SD	M	SD	M	SD
将来への希望	2.55	0.60	2.65	0.68	2.62	0.64	2.53	0.54	2.64	0.59	2.56	0.64
将来への志向性	2.51	0.60	2.58	0.61	2.56	0.68	2.61	0.56	2.68	0.67	2.71	0.60
空虚感	2.48	0.67	2.50	0.74	2.50	0.73	2.40	0.62	2.39	0.67	2.42	0.67
計画性	2.27	0.57	2.26	0.63	2.24	0.60	2.33	0.52	2.23	0.54	2.31	0.56
将来目標の渴望	2.85	0.65	2.77	0.70	2.84	0.77	2.81	0.61	2.82	0.70	2.92	0.63
自己価値	2.40	0.55	2.50	0.63	2.49	0.61	2.25	0.48	2.29	0.51	2.34	0.55
信頼できる他者の存在	2.81	0.66	2.83	0.70	2.80	0.79	3.17	0.61	3.26	0.59	3.27	0.60
自己否定	2.76	0.64	2.84	0.73	2.89	0.70	2.89	0.59	2.95	0.58	3.01	0.59
自己への満足感	2.23	0.68	2.17	0.77	2.24	0.76	2.07	0.65	1.97	0.63	2.02	0.71
学校享受感	2.67	0.66	2.70	0.75	2.70	0.68	2.73	0.65	2.76	0.69	2.83	0.65
勉強理解度	2.12	0.72	2.14	0.77	2.18	0.78	2.16	0.65	2.04	0.70	2.23	0.73
不定愁訴	1.72	0.44	1.83	0.54	1.80	0.44	1.90	0.43	1.92	0.45	1.93	0.43
進路意識	2.75	0.71	2.87	0.74	2.86	0.73	2.87	0.66	2.99	0.74	2.90	0.65

(注)○は調査に参加、◎は次の調査への協力申し出、×は調査に不参加を意味する。

Table10に示したのは、2009年コホートにおける3群の尺度得点である。

男子においては、分散分析の結果、「将来への希望」(F (2,728) = 4.06, $p < .05$), 「自己価値」(F (2,732) = 7.16, $p < .01$), 「信頼できる他者の存在」(F (2,732) = 3.35, $p < .05$), 「進路意識」(F (2,731) = 4.12, $p < .05$)の主効果が有意だった。多重比較をおこなったところ、卒業後調査で返信なし群は高校3年生調査のみ参加群よりも、「将来への希望」「自己価値」「信頼できる他者の存在」の得点が有意に高かった ($p < .05$)。2度調査参加群は高校3年生調査のみ参加群よりも、有意に「進路意識」の得点が高かった ($p < .05$)。

Table10 高校3年生・卒業1年目調査に対する態度3群の尺度得点

(2009年コホート)

	男 子						女 子					
	高3○		高3◎卒1×		高3◎卒1○		高3○		高3◎卒1×		高3◎卒1○	
	M	SD	M	SD	M	SD	M	SD	M	SD	M	SD
将来への希望	2.51	0.64	2.67	0.70	2.62	0.64	2.54	0.52	2.62	0.63	2.67	0.62
将来への志向性	2.51	0.61	2.52	0.70	2.65	0.62	2.62	0.56	2.70	0.56	2.76	0.63
空虚感	2.50	0.65	2.53	0.68	2.54	0.71	2.39	0.59	2.39	0.69	2.39	0.67
計画性	2.31	0.57	2.30	0.52	2.35	0.60	2.31	0.53	2.20	0.56	2.30	0.55
将来目標の渴望	2.84	0.69	2.92	0.69	2.80	0.66	2.88	0.60	3.02	0.59	2.93	0.63
自己価値	2.39	0.60	2.58	0.62	2.41	0.56	2.27	0.45	2.37	0.52	2.34	0.49
信頼できる他者の存在	2.77	0.69	2.93	0.68	2.82	0.69	3.19	0.60	3.25	0.62	3.20	0.65
自己否定	2.78	0.71	2.78	0.68	2.94	0.65	2.90	0.60	2.94	0.65	2.89	0.60
自己への満足感	2.22	0.72	2.20	0.74	2.19	0.65	2.07	0.59	2.06	0.60	2.03	0.62
学校享受感	2.74	0.62	2.77	0.63	2.81	0.66	2.82	0.64	2.83	0.74	2.91	0.65
勉強理解度	2.25	0.71	2.32	0.78	2.20	0.73	2.27	0.66	2.16	0.76	2.33	0.74
不定愁訴	1.75	0.45	1.70	0.43	1.71	0.47	1.90	0.42	1.94	0.44	1.91	0.44
進路意識	2.69	0.70	2.81	0.74	2.89	0.66	2.89	0.64	2.98	0.65	3.05	0.68

(注)○は調査に参加, ◎は次の調査への協力申し出, ×は調査に不参加を意味する。

女子においては、「将来への希望」(F (2,858) = 4.13, $p < .05$), 「将来への志向性」(F (2,868) = 4.64, $p < .01$), 「計画性」(F (2,861) = 3.07, $p < .05$), 「将来目標の渴望」(F (2,863) = 3.85, $p < .05$), 「自己価値」(F (2,852) = 3.54, $p < .05$), 「勉強理解度」(F (2,871) = 3.15, $p < .05$), 「進路意識」(F (2,872) = 4.78, $p < .01$), において有意差が見られた。多重比較をおこなったところ、2度調査参加群は、高校3年生調査のみ参加群よりも有意に「将来への希望」「将来への志向性」「進路意識」の得点が高かった($p < .05$)。2度調査参加群は、「勉強理解度」の得点が卒業後調査で返信なし群よりも有意に高かった($p < .05$)。卒業後調査で返信なし群は、高校3年生調査のみ参加群よりも、「将来目標の渴望」「自己価値」の得点が有意に高かった($p < .05$)。

Table11に示したのは、2010年コホートにおける3群の尺度得点である。

男子においては、分散分析の結果、「自己価値」(F (2,627) = 3.09, $p < .05$)と「進路意識」(F (2,640) = 6.93, $p < .01$)において主効果が有意だった。多重比較をおこなったところ、2度調査参加群は、高校3年生調査のみ参加群よりも「自己価値」の得点が有意に高かった($p < .05$)。卒業後調査で返信なし群は、高校3年生調査のみ参加群よりも有意に「進路意識」の得点が高かった($p < .05$)。

女子においては、分散分析の結果、「将来目標の渴望」(F (2,750) = 4.22, $p < .05$)と「自己価値」(F (2,736) = 4.10, $p < .05$)において主効果が有意だった。多重比較をおこなったところ、2度調査参加群は、高校3年生調査のみ参加群よりも、「将来目標の渴望」と「自己価値」の得点が有意に高かった($p < .05$)。2度調査参加群は、卒業後調査で返信なし群よりも有意に「将来目標の渴望」の得点が高かった($p < .05$)。

このように、男子では7つ、女子では11の尺度において、3群間に有意な差が見られた。その一方で、8割以上の尺度では群間に有意差が見られ

Table11 高校3年生・卒業1年目調査に対する態度3群の尺度得点

(2010年コホート)

	男 子						女 子					
	高3○		高3◎卒1×		高3◎卒1○		高3○		高3◎卒1×		高3◎卒1○	
	M	SD	M	SD	M	SD	M	SD	M	SD	M	SD
将来への希望	2.53	0.62	2.58	0.66	2.67	0.67	2.56	0.57	2.63	0.57	2.61	0.59
将来への志向性	2.50	0.64	2.61	0.67	2.49	0.63	2.64	0.56	2.69	0.63	2.69	0.62
空虚感	2.59	0.65	2.52	0.67	2.52	0.77	2.49	0.63	2.37	0.63	2.42	0.67
計画性	2.23	0.54	2.29	0.61	2.27	0.64	2.28	0.52	2.24	0.61	2.34	0.60
将来目標の渴望	2.87	0.67	2.93	0.72	2.88	0.76	2.87	0.62	2.83	0.67	3.01	0.57
自己価値	2.42	0.58	2.49	0.60	2.59	0.70	2.28	0.45	2.34	0.50	2.40	0.49
信頼できる他者の存在	2.80	0.67	2.86	0.68	2.95	0.76	3.16	0.63	3.26	0.58	3.27	0.63
自己否定	2.86	0.64	2.88	0.72	2.91	0.70	2.93	0.59	2.93	0.60	2.89	0.59
自己への満足感	2.20	0.69	2.20	0.73	2.20	0.83	1.99	0.59	2.06	0.59	2.06	0.58
学校享受感	2.70	0.62	2.75	0.67	2.81	0.75	2.73	0.63	2.77	0.68	2.82	0.70
勉強理解度	2.21	0.67	2.20	0.72	2.28	0.72	2.16	0.69	2.23	0.61	2.22	0.72
不定愁訴	1.76	0.46	1.78	0.46	1.71	0.43	1.90	0.41	1.92	0.46	1.91	0.43
進路意識	2.65	0.71	2.87	0.75	2.85	0.72	2.90	0.67	3.03	0.68	2.95	0.68

(注)○は調査に参加，◎は次の調査への協力申し出，×は調査に不参加を意味する。

なかった。

(4) 結 論

本研究では、縦断的調査に協力してくれる生徒たちの特徴を検討するために、高校での調査だけに参加した生徒と卒業後の調査に協力を申し出た生徒、卒業後の調査への参加者と不参加者の間で、時間的展望、自己意識、学校生活意識、不定愁訴、進路意識の得点の差異を比較した。得られた結果からは、高校3年生のときに、卒業後の調査への参加協力を申し出た生徒や、実際に卒業1年目の調査に回答して質問紙を返信した参加者は、高校3年生の調査対象者とあまり大きく異ならない回答をしているこ

とが明らかになった。このことから、縦断的な郵送調査に協力する生徒は、高校生・卒業生の意識を代表しているといえるであろう。

付記 本研究は、日本学術振興会科学研究費補助金基盤研究C（研究課題番号20530607）の助成を受けた。

文 献

- 都筑学（2007） 大学生の進路選択と時間的展望 ナカニシヤ出版
都筑学（2008） 小学校から中学校への学校移行と時間的展望 ナカニシヤ出版
都筑学（2009） 中学校から高校への学校移行と時間的展望 ナカニシヤ出版